
絵本を活用した子どもの心のケア

「ずーっと　ずっと　だいすきだよ」

吉村 真理子・小熊 真弓

Mental healthcare for children through the use of picture book?
“I'll Always Love You”

Mariko YOSHIMURA / Mayumi OGUMA

キーワード：心のケア、認定絵本土、教育相談、保育内容「言葉」

1 問題と目的

(1) 「認定絵本土」資格について

千葉敬愛短期大学現代子ども学科保育コースは、絵本専門士委員会（事務局：国立青少年教育振興機構）の認定を受け、2018年度から認定絵本土養成講座を開設した。「認定絵本土」とは、国立青少年教育振興機構が養成している「絵本専門士」の基礎資格であり、絵本専門士とは、絵本の魅力や活用方法を社会に広め、実際に読み聞かせなどを行う絵本のスペシャリストである。本学学生は認定絵本土養成講座カリキュラムの科目を取得することによって本学卒業と同時に認定絵本土資格を取得でき、さらにその後の幼稚園や保育所等での3年以上の実務経験とレポート審査等を経て、絵本専門士資格を申請することができる。

(2) 「心に寄り添う絵本（心のケアと絵本の可能性）」について

認定絵本土養成講座カリキュラムの「感性を磨く」分野に、「心に寄り添う絵本（心のケアと絵本の可能性）」という科目があり、本学では筆者（吉村）の担当する授業である「教育相談」の1コマをそれに当てている。当該科目の修得目標は、「心のケアが求められている場面や場所における絵本活用の可能性について理解する」である。

絵本専門士養成講座における同科目については、聖路加国際病院に小児科医として勤務している小澤美和医師が担当し、医療現場での絵本の活用について講義を行っている。筆者（吉村）は、認定絵本土養成講座開設担当責任者として、2017年度の絵本専門士養成講座を聴講する機会を得た。小澤（2017）は、癌などの重篤な病気で親やきょうだいを亡くすというトラウマ体験に遭遇した子どもたちの内面について、「子どもたちは病気や死について知らないことだらけであるため、『不安、怖い、寂しい、悲しい・怒り・イライラ、困る、孤立』等の陰性感情が自分で抱えきれなくなるとさまざまな反応を示すが、無意識に自己防衛するため周囲にはわかりにくい反応となる。死についてわからないままでは、大人との信頼関係が築けず、自己肯定感も育たない」と述べている。そこで、小澤は、子どもたちが死について子どもたちなりに理解し、家族の死についての心構えを持てるよう、絵本を活用して死について子どもたちに伝える試みを行っているのである。

絵本を用いる理由については、「まず、子どもにとって絵本は馴染みがあり手に取りやすい。読み聞かせは聴覚だけではなく、視覚からの情報も得られる。それも少ない言葉と絵であるため、想像する自由度がある。文字だけでなく絵があることで伝達機能に優しさが生まれる（小澤〔2017〕）」としている。さらに、絵本の読み聞かせは、「主人公や物語に自分を重ねながら共感することで孤立感を和らげることができる。心の中の葛藤を表現することができる。大人と子どもをつなぐコミュニケーション・ツールとしての役割を果たす（小澤〔2017〕）」と指摘している。

また、絵本の選書基準については、「その絵本の中に、自らの伝えたいメッセージがどのように語られ、表現されているかを吟味すること。子どもが身近な人の死に向き合わなければならないときに励ましてくれるような言葉があること。陰性感情を助長しないもの（小澤〔2017〕）」を挙げている。

そして最後に「大切なこと」として、「大人が自分のために読んでくれるという時間の共有や、そばで声を聴くという体験が子どもに安心感を与え、子どもは「絵を読む」ので大人には見えない言葉が見えてくる（小澤〔2017〕）」ののだとしている。

（３） 死をテーマとして、子どもたちに絵本で伝えたいこと

本学の認定絵本土養成講座カリキュラム「感性を磨く」分野の「心に寄り添う絵本（心のケアと絵本の可能性）」については、「教育相談」の授業のなかで「心のケアについて考えよう！～絵本で子どもたちに伝えたいこと～」と題したワークシートを配付し、「死」「友だち」「きょうだい」「その他」の４項目を挙げ、いずれか一つのテーマを選び、書名、著者名、出版社名、子どもたち（５歳児を想定）に伝えたいメッセージについて記入を求めた。さらに、それをもとに５、６人のグループでブックトークを行い、各グループで最も子どもたちに読み聞かせしたいチャンプ本を選出し、クラス全体で発表を行った。各テーマには記入の際にヒントとなるよう「おじいちゃん、おばあちゃん、ずっといっしょだった家族のようなペットを亡くして・・・（死）」「ケンカしちゃった・・・友だちになりたいのに・・・（友だち）」「ケンカしちゃった・・・赤ちゃんが生まれてかわいいけど・・・（きょうだい）」というように、悲しみ・残念な気持ち・寂しさ等の子どもの心情を記載した。

保育コース２年生１８６名（男子４名、女子１８２名）のうち、心のケアのテーマとして「死」を選んだ学生は、８６名であった。その２４％である２１名の学生が選んだ本が、「ずーっとずっとだいすきだよ」（作・ハンス・ウィルヘルム、訳・久山太市 評論社 １９８８年）である（表１参照）。

本研究では、彼らの選書結果及び選書理由から、その絵本の持つ意味等を探っていきたい。

（４） 作品『ずーっと、ずっと、だいすきだよ』と学生の選書理由

絵本「ずーっと、ずっと、だいすきだよ」のカバーに記された「前書き」には「エルフィーとぼくは、いっしょに大きくなった。年月がたって、ぼくの背がのびる一方で、愛するエルフィーは太って動作もいぶくなっていった。ある朝、目が醒めると、エルフィーが死んでいた。深い悲しみにくれながらも、ぼくには、ひとつ、なぐさめが、あった。それは・・・」とある。一方、同後書きには「お母様方へ」と題し、『ずーっと、ずっと、だいすきだよ』で語られるテーマは、大変美しい考え方ではないでしょうか。相手が、人間だろうと動物だろうと、愛するものに対して、心のありったけで、『愛している』と告げてあげよう。それは日々の暮らしを暖（ママ）めて、幸せにしてくれる、そして、やがてやってくる『死』をいたずらに嘆くことなく、愛の思い出が悲しみをいやし、なぐさめをもたらししてくれるだろうというのです。お子さまにどうか、人や動物に愛を注ぐ心の大切さを、教えてあげてください。」とある。

『ずーっと、ずっと、だいすきだよ』は、以下のように、主人公「ぼく」が愛犬エルフィーをいかに愛していたかが回想の形を取って描かれている（・・・は略を表す）。

表1 「死」に関する心のケアで活用する絵本

順位	票数	書名	作者			出版社	初版年
			文	訳	絵		
1	21	ずーっとずっとだいすきだよ	ハンス・ウィルヘルム	久山 太市	ハンス・ウィルヘルム	評論社	1988
2	16	おじいちゃんがおばけになったわけ	キム・フォックス・オーカソン			あすなろ書房	2005
3	9	わすれられないおくりもの	スーザン・バーレイ	小川 仁央		評論社	1986
4	5	いつでも会える	菊田 まりこ			学研プラス	1998
5	5	ママがおばけになっちゃった	のぶみ			講談社	2015
6	5	おじいちゃんのごらくごらく	西本 鶏介		長谷川 義史	鈴木出版	2006
7	4	さようならおばあちゃん	メウニー・ウォルシュ	なかがわ ちひろ		ほるぶ出版	2014
8	3	だいすきなグー	ごとう やすゆき		いもと ようこ	PHP研究所	2005
9	2	おかあさんどこいったの	レベッカ・コップ	おーなり 由子		ポプラ社	2014
10	1	いぬはてんごくで	シンシア・ライラント	中村 妙子		信成社	2000
11	1	いのちのはな	のぶみ			角川書店	2016
12	1	うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん	ディック・ブルーナ	まつおか きょうこ		福音館書店	2008
13	1	おばあちゃんがいるといいのにな	松田 素子		石倉 欣二	ポプラ社	1994
14	1	おもいで星がかがやくとき	刀根 里衣			NHK出版	2017
15	1	かわいそうなぞう	土家 由岐雄		武部 本一郎	金の星社	1970
16	1	がんばれ! くるまのうさぎぴよんた	岩崎 京子		渡辺 有一	教育画劇	2002
17	1	きつねのおきやくさま	二俣 英五郎		あまん きみこ	サンリード	1984
18	1	シニガミさん	宮西 達也			えほんの社	2010
19	1	ずっとずっといっしょだよ	宮西 達也			ポプラ社	2012
20	1	ずっとそばに…	いもと ようこ			岩崎書店	2007
21	1	だいじょうぶ だいじょうぶ	いとう ひろし			講談社	1995
22	1	てんごくのおとうちゃん	長谷川 義史			講談社	2008
23	1	でも、わたし生きていくわ	コレット・ニース＝マズール	柳田 邦男	エステル・メンス	文溪堂	2009
24	1	100万回生きたねこ	佐野 洋子			講談社	1977
25	1	やさしいライオン	やなせ たかし			フレーベル館	1982

・・・ぼくたちは、いっしょに大きくなりました。でも、エルフィーのほうが、ずっとはやく、大きくなったよ。・・・エルフィーとぼくは、まいにちいっしょに、あそんだ。・・・ときどき、エルフィーがわるさをすると、うちのかぞくは、すぐおこった。でも、エルフィーをしかっていないがらみんなはエルフィーのことがだいすきだった。すきなら、すきといってやればよかったのに、だれも、いってやらなかった。いわなくっても、わかるとおもっていたんだね。・・・エルフィーは、としをとって、ねていることがおおくなり、さんぽをいやがるようになった。ぼくは、とてもしんぱいした!・・・ぼくは、エルフィーに、やわらかいまくらをやって、ねるまえにはかならず「エルフィー、ずーっと、だいすきだよ」っていってやった。エルフィーは、きっとわかってくれたよね。あるあさ、めをさますとエルフィーが、しんでいた。・・・みんな、ないてかたを、だきあった。・・・ぼくだってかなしくてたまらなかったけど、いづらか、きもちがらくだった。だってまいばんエルフィーに、「ずーっと、だいすきだよ」っていってやっていたからね。となりの子が、子犬をくれるといった。もらってもエルフィーは気にしないって、わかっていたけどぼくは、いらないうっていった。・・・いつかぼくも、ほかの犬を、かうだろうし子ネコやキングヨも、かうだろう。なにをかって、まいばんきつと、いってやるんだ。「ずーっと、ずっと、だいすきだよ」って。

学生たちの記述を集計すると、以下のものであった〔（ ）内の数字は人数を表す〕。

〔メッセージを伝えたい子どもたちの状態〕

- ・「ペットが死んじゃった」と教えてくれた
- ・大切な人を失い、悲しい
- ・園で飼っていた動物が死んでしまった
- ・生き物の死が理解できる年齢になっている
- ・飼育を経験したことがある
- ・まだ死に触れたことがない
- ・友だちや保育者に対し手を出したり悪口を言ったりするようになってきた

〔子どもたちに伝えたいメッセージ〕

- ・日々、生きているうちに「好き」「愛している」「ありがとう」「ごめんね」等の想いを、恥ずかしがらずきちんと言葉にして伝える大切さ（7）
- ・もしものときに後悔しないように今たくさん愛情を注いでほしい（5）
- ・命の大切さ、尊さ（3）
- ・生きている今という時間を大切にしてほしい（2）
- ・伝えたいときにすぐ伝えなければその人に届かない
- ・感謝の気持ちを忘れないでほしい
- ・別れの辛さ
- ・死の辛さ
- ・ペットも父母や兄弟と同じくらい大切な家族である
- ・ペットはあなたと過ごせて楽しい気持ちがあるし、たくさん遊んでくれてありがとうという気持ちがきつとある
- ・亡くなっても大空から見守ってくれている
- ・ずっと悲しんでいるとペットも悲しくなってしまうから少しずつ元気を取り戻して頑張ろう
- ・それだけペットが好きだった証拠だから無理して忘れなくてよい
- ・動物にも人にも生き物に死は必ず訪れる
- ・犬の寿命は人間に比べて短い
- ・悲しい思いに寄り添う絵本があるということ
- ・ぼくがどのように立ち直っていったのか
- ・絵本の中に本人と重なる場面があるはず
- ・保育者が幼い頃に犬を飼っていて朝起きたときに病気で亡くなっていたという主人公と同じ経験をした

学生たちの記述には、「ぼく」が、エルフィーとの永遠の別れの悲しさに何とか耐えることができたのは、エルフィーを大好きだという気持ちを実際に言葉にしてずっと伝えてきたからであり、想いを言葉にして伝えることの大切さを子どもたちに感じ取ってもらいたいというものが多かった。また、命（時間）は無限にあるように思ってしまうがちであるが、別れが来たときに後悔しないように、目の前の相手に多くの愛情を持って接してほしいという記述も多かった。

5歳児ともなると、園で主となって飼育当番の係を務めたり、家庭においても飼い犬を散歩に連れて行ったり、排泄物の処理をしたりといった行動を取るようになるだろう。そして、自分が責任を持って世話をしなければペットは生きていけないこと、また命あるものには必ず死が訪れること等を身をもっ

て理解し、自分が愛情を持って接することでお互いにかけがえのない存在となっていくのである

核家族化が進み、子どもたちは、ともに生活してきた祖父母が老いていくことや亡くなること等に遭遇する体験は大変少なくなっている。そのようななか、保育者が園でのさまざまな機会をとらえて、「死」という事実じつくりと関わっていくことの意義は大きい。例えば、幼児が園で飼育しているチョウチョやバッタなどの死に遭遇した際に、昆虫にも命があることを子どもたちと話し合ったり、その死を受け入れるために皆でお墓をつくったりしながら、命あるものへの労りの気持ちを育てていく。子どもたちは、保育者に支えられながら、自分たちが育てたものが死んでしまったという悲しみや寂しさを共有し合い、癒されていくのである。そして、生き物の命と向き合うことに丁寧に関わることで、愛おしいと思う感情や悲しみを経験した子どもたちの心は豊かに育っていくであろう。

また、子どもたちが「死」に遭遇した際に感じる悲しみや寂しさ等の感情を和らげる援助、すなわち心のケアとして、身近な大人である家族や保育者の「共感」が大きな力となる。幼児は、自分の感情を言葉で的確に表現することはまだ難しいので、保育者が「～さんは～な気持ちなのね」「～さんは～って思ったのね」と感情を代弁して伝え返し、感情を言葉で表現できるようにしていくことが必要である。悲しみや寂しさといった感情を言葉にすることで、皆で共有し合い、癒されていくことが可能となると言えよう。幼稚園教育要領の言葉のねらい（3）には、「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」とある。自分の伝えたい気持ちを表現したり、友だちの話を聞いて互いに思いを伝え合ったりすることで、絵本を読んだ後の感情を先生や友達と共有し合えるのである。

さらに、子どもは保育者に絵本を読んでもらうことで、その本の内容を理解するだけでなく、信頼している人の温かな言葉を聴くことで心が安定し、心地よさを味わう。自分の悲しみや寂しさは『ずーっとずっとだいすきだよ』の「ぼく」のように「大好きという気持ちを言葉にして伝えることが大事、伝えられたら悲しさは乗り越えていける」と徐々に理解ができるようになるものと考ええる。

2 作品『ずーっとずっとだいすきだよ』の活用と今後の課題

『ずーっとずっとだいすきだよ』は、「小学校1年 こくご下巻（光村図書）」にも収録されている。ただし、タイトルは『ずうっと、ずっと、大すきだよ』、犬の名前である「エルフィー」は「エルフ」とされている。

当該教科書の指導書には、この単元（全8時間扱い）の3・4時間目のめあてとして「すきなところや、おもしろいところを見つけながら、お話を読もう」とある。さらに、主な発問・指示とその意図として「エルフが死んで、隣の子が子犬をくれると言ったとき、ぼくはどうしましたか？」といった発問により、ぼくのエルフに対する思いを押さえるとなっている。

「他者の感情状態を認知することで、他者と同じような情動経験をすること」（Feshbach, N.D. [1976]）という「共感性」（empathy）の認知的側面を構成するものとして「役割取得能力」（role-taking ability）がある。他者の立場を取り、他者の認知・意図・行動を推論する能力であり、他者との相互交渉をする際に必要な、他者の視点と自己の視点との関係を理解する能力と考えられる。この役割取得能力を測定するものとしてSelman課題（Selman, R.L. & Byrne, D.E. [1974]）がある。これは、いずれも葛藤場面を含んだ物語で、登場人物が他者の視点をどのように理解していると子どもは考えるのかを段階評定するものである。Selman課題の一つとして、「（あきら君は）飼い犬が死んで悲しんでいる友だち（正男君）の誕生日に犬をプレゼントするかどうか」というものがあり、「もし、あきら君が正男君に犬をあげたら、正男君はどう思うかな？」を尋ねることで段階評定している。すなわち、『ずーっとずっとだいすきだよ』によく似た物語であるといえる。

Selman のレベルは、レベル0「自己中心的役割取得 (Egocentric perspective taking)」、レベル1「主観的役割取得 (Subjective perspective taking)」、レベル2「自己内省的役割取得 (Self-reflective perspective taking)」、レベル3「相互的役割取得 (Mutual perspective taking)」の4段階から構成されている。

吉村 (2001) は、Selman 課題の評定レベルの基準 (Selman, R.L [1976]) とそれを紹介している木下 (1982) 菊池 (1983) を参考にし、視点という概念に基づいて、レベル0「自己の視点の固執」、レベル1「二者の視点の並列と、一者の無条件の優先」、レベル2「二者の視点の拮抗と、両者の葛藤」、レベル3「第三者の視点の導入による葛藤の解決」というように再定義し、評定を試みた。これは、役割取得能力を、自己の視点と他者の視点とが分化し、その両視点間の調整がなされていく構造的変化の過程としてとらえようとするものである。「飼い犬の死」に関する Selman 課題についての回答の評定レベルは表2のようになっている。

幼児が、幼児期の発達の特性である自己中心性を脱し、他者の視点に気づき配慮しつつ、自分の想いも大切にして自らの行動を決定していくことができるようになるということが、役割取得能力のレベル3「第三者の視点の導入による葛藤の解決」への到達となるのである。幼児の役割取得能力を高められるような働きかけとして、『ずーっとずっとだいすきだよ』を用い、子どもたちにどのような問いかけをすることによって、他者の視点への気づきと自己のそれとの自然な形で融合を可能とすることができるか、また、保育者が自らの体験を話したり、同じような経験をしたことがある子どもに経験を語ってもらったりすることの効果等について検討していきたい。

■参考文献

- ・ Feshbach, N.D. 1976 Empathy in children: A special ingredient of social development, Invited address to the meeting of the Western Psychological Association Los Angeles, April.
- ・ ハンス・ウィルヘルム (久山太市訳) 1988 ずーっとずっとだいすきだよ 評論社
- ・ 菊池章夫 1983 『波多野・依田 児童心理学ハンドブック』 金子書房
- ・ 木下芳子 1982 「社会的コンピテンス」 波多野誼余夫 (編) 『発達教育心理学講座』 朝倉書店
- ・ 光村図書 1992 国語 学習指導書 1年下 ともだち
- ・ 小澤美和 2017 2017年度 絵本専門士養成講座「心のケアと絵本の可能性—ストレス体験を持つ子どもたちに—」 レジュメ (2017.12.5)
- ・ Selman, R.L. & Byrne, D.F. 1974 A Structural-Developmental Analysis of Levels of Role Taking in Middle Childhood Child Development, 45, 803–806.
- ・ Selman, R.L. 1976 A Developmental approach to interpersonal and moral awareness in young children: some educational implications of levels of social perspective-taking. In T.C. Hennesy (Ed.) Values and Moral Development, Pau List Press.
- ・ 吉村真理子 2001 共感性の認知的要素としての「役割取得能力」測定の試み 千葉敬愛短期大学紀要 第23号 pp. 87–98